

# 学生全員参加型海外研修の取り組み、成果および課題

長谷川 明\*・小坂谷 壽 一\*・高 橋 史 朗\*\*・川守田 礼 子\*\*

## International Institute : Firsthand Education with Participation of the Entire Students

Akira HASEGAWA\*, Juichi KOSAKAYA\*, Fumiaki TAKAHASHI\*\*,  
and Reiko KAWAMORITA\*\*

### Abstract

In order to fulfill its educational goals, the Department of Kansei Design in Hachinohe Institute of Technology has put much stress on firsthand education. The international institute in the United States, held in June, is one of the educational programs of significance for the department. It provides the students with opportunities to learn intercultural understanding, communication skills, and artistic senses practically. It is substantially a required subject for the students in the department, although some of them in this year did not participate because of economical or health reasons. In this brief paper, we will report the outline of the educational process including the activities before and after the program, its successful result, and some of the problems still remain.

**Keywords:** Kansei Design, international institute, Wesley College, firsthand education

### 1. 目的と背景

#### (1) 感性デザイン学部感性デザイン学科

平成 17 年度に開設された感性デザイン学部感性デザイン学科は、感性デザインを「人を理解し、思いやり、その心を創造的に伝えること」と定義し、人々が本当に求めているもの、人々にとって大切なものを見だし、それを創造する人材を育成している。また、このような人材にとって必要な能力・知識として、「コミュニケーション」、「創造・表現」そして「福祉・健康/くらし」を学んでいる。学外研修という科目として実施されたアメリカ Wesley 大学での海外研修（以下海外研修）は、これら 3 つを総合的に高める教育プログラムである。なお、本学

科では、体験的学習による教育成果を高く評価しており、本研修をはじめとして、各種実習・演習、インターンシップおよび卒業制作などの体験的学習を、その教育の特色としている。

#### (2) 研修目的

本研修は、特に次の目的を持って実施された。

##### ① 異文化理解能力育成

上で定義されている感性デザイン学科が求める力は、人の行動や思考方法、意見や感情を理解することと密接に関係している。文化的な背景が異なる相手に対しても柔軟に対応できる人材の育成にあたっては、海外における「くらし」の仕組み、表現方法、文化、あるいは歴史や慣習などを体験することは極めて重要視されている。そこで、海外研修における最大の目的を異文化理解能力の育成においている。

---

平成 19 年 1 月 5 日受理

\* 感性デザイン学科・教授

\*\* 感性デザイン学科・講師

## ② コミュニケーション能力育成

第二に、外国人との交流による英語によるコミュニケーション能力を育成することを目的とした。短期間であることから個別的、具体的な言語能力の向上を目指すものではなく、実際の英語に触れることで英語によるコミュニケーションの楽しさを体験させ、今後の学習動機を向上させることを主眼に置いた。一方、英語によるコミュニケーションがどこまで可能なのか、どうすれば理解してもらうことができるのかといった体験的にしか学習できない項目については、海外研修中の大きな課題として学生に提示した。

## ③ 芸術などの鑑賞による感性の育成

「創造・表現」に関わる豊かな感性の育成も海外研修の大きな要素である。歴史的に評価されてきた「ほんもの」の西洋美術・建築・芸術に触れることは、この育成に大きな効果を生むと考え、世界的に著名な作品が展示されている美術館での鑑賞を取り入れ、学生の感性デザイン力を総合的に高めることを目的とした。

## (3) 全員参加型・経費

前述のように、課程表の上では、本研修は学外研修と位置づけられているが、この科目は選択科目である。これは、健康上の理由などによって参加できない場合の代替教育が提供できないことから、必修科目とすることは必ずしも望ましくはないとの判断に基づいている。しかしながら、本研修による教育成果はきわめて大きいと考えることから、基本的には全員参加を原則とし、1年次から指導を行ってきた。実質的に、今回の研修は、これまで本学で実施されてきた「海外に関心がある」、「費用は自分で調達する」学生に限られた海外研修から、「全員が行く」、「大半の費用を大学が負担する」海外研修へとその性格を大きく変えるものとなった。

経費については、全員参加型の教育経費は、授業料が基本であることを考慮し、成田空港から海外滞在分のほぼ全額を学内経費で実施した。

参加者は、八戸から成田空港までの旅費、および海外でのホテル滞在時の昼食・夕食、その他自由行動中の経費のみを負担した。

このような研修実施上の大きな転換に伴って、研修の事前指導、事後指導のあり方も同時に変容している。例えば、関心がある、ないに関わらず「全員が行く海外研修」を安全に実施するためには、学生の関心を深める教育を事前学習として実施しなければならない。そこで本稿では、感性デザイン学科の魅力的教育の一つとしている「海外研修」について、その取り組み、成果および課題を、アメリカ現地での研修前後の指導状況も包括して報告する。

## 2. 実施計画

実施に当たっては、事前調査が行われた。これまで実施されたアメリカ海外語学研修時の参加学生数が、例年十数名程度であったことに対し、感性デザイン学科学生と工学部学生、併せて50名を超えるこれまでにない学生数を引率することが見込まれていたこと、教育目標に合致する見学施設の事前調査、行程に関する情報が必要であったことが、その大きな理由である。

### (1) 事前調査

事前調査は、2005年6月の海外研修時(参加学生は工学部のみ)に、これまで引率を担当してきた町屋昌明助教授に加え、坂本禎智教授、高橋史朗講師および川守田礼子講師を派遣し、見学先、研修行程、経費などの詳細を調査した。この調査結果は、今回の研修先の選定、安全面の課題の発見などの点で、実勢計画の策定に大きく貢献した。

### (2) 直前交渉

Wesley大学滞在中の研修計画の決定は、想定していた時期に比べ大幅に遅れ、最終的には、坂本禎智教授を団長とし、小坂谷壽一教授、町屋昌明助教授の3名が、2006年3月に現地を訪

れ、Wesley 側と最終折衝を行い、大卒の合意を見たものである。遅れの要因は、研修期間、行程および費用について、双方の意見集約に時間を要したためであった。この遅れは、計画決定を待って参加案内をした工学部学生への広報に大きな影響をもたらした。しかし、この事前調査時には、Wesley 滞在中の研修にかかわる条件などを明確化できたばかりではなく、特にニューヨーク市、ワシントン DC での研修行程に関する詳細調査を行うことができた。この調査結果は、実施計画立案の確認に有効であった。

### (3) 最終計画

最終的には、3つの研修目的に対応させ、次のような計画とした。詳細は、参考資料2研修日程を参照されたい。

- ① Wesley 大学で1週間の語学研修および異文化体験
- ② ニューヨーク市の2つの美術館での芸術鑑賞と建築・まちづくり見学
- ③ ワシントン DC の博物館群の見学（これには工学部の参加学生の興味と関心に併せた施設の見学が含まれる）
- ④ 適正な費用での実施とし、日程は11泊12日。海外対応は地元旅行社が担当

## 3. 学生への連絡・指導

### (1) 入試・広報活動

本学科開設前年度において、本学科の人材育成基本方針が検討され、「コミュニケーション」、「創造・表現」そして「福祉・健康/くらし」の力の育成に重点に置くことで具体的教育手法、カリキュラムが検討された。その際、特に「体験的学習」をこの3分野において広く取り入れることとし、とりわけコミュニケーション教育の重要な教育活動の一つとして「全員が取り組む海外研修」を位置づけた。また、それ以降、これを本学科の特色ある教育のひとつとして、「アメリカで約2週間、費用は授業料に含む」と広

報し、本学科の魅力の大きな源であると同時に、全員参加の海外研修であることへの理解を求めてきている。

### (2) 入学後の指導

入学前の広報活動に加え、入学式・ガイダンスにおいて、この教育の重要性を伝えると同時に自己負担分の費用についての協力を、保護者・学生に依頼した。その後、1年次から、具体的な研修の事前指導を行っている。主な作業スケジュールは、参考資料1に示したとおりであるが、学生指導は15回に及んだ。なお、指導の内容については下記3-(4)に示す。

### (3) 指導体制

学生への指導は、当該学年の担任が主にあたり、必要に応じて学部長、引率教員が対応した。なお、引率教員は、学部長兼学科長の長谷川教授を代表とし、工学部から小坂谷教授、英語教育から高橋（史）講師、感性デザイン学科担任および女子指導として川守田講師の4名であった。

### (4) 指導内容

研修前後に行われた指導の内容は、以下の通りである。前述のように、指導期間は極めて長期にわたり、研修後もいくつかの課題、行事への参加を学生に求めている。

#### ① 学生の意識高揚指導

海外での学習には安全面についての意識を高めることが最も重要であるとの認識の下、担当教員による海外研修の意義、研修日程説明、研修先の事前調査指導などのほか、航空会社OB講師による出入国手続き注意指導も実施した。研修の具体的な説明は、事前指導の学生集会が中心となったが、日常の授業の際にも、引率教員を中心に意識を高める指導を行った。

#### ② 学生の旅行準備作業

パスポート取得指導（ほぼ全学生が取得を要していた）から、アメリカ滞在時の注意事項、

Wesley 滞在時の注意事項, 出入国手続き, 旅行保険申請記入指導などを実施した。

### ③ グループワーク・班行動

感性デザイン学部参加学生を3~4名のグループに分け, グループで取り組む課題を課した。テーマは事前に提示し, 研修前に構想を立て, 研修中に資料・情報の収集を行い, 研修後にプレゼンテーションをするというものである。これは, 研修の目的を明確化すると同時に, 学生同士のコミュニケーション意識を高めることを目的としている。グループワークでは, それぞれのグループでコミュニケーションを図りながら, 異文化, 芸術, 英語コミュニケーションに関わるトピックスについて, 結束して行動することを求めた。プレゼンテーションは, 引率教員を中心に学科内で実施し, 学外研修の評定資料とした。

上記課題に取り組むグループとは別に, 海外研修中の行動単位として, 3~4名の班編成を行った。これは研修中の行動原則を班単位とすることによって, 自律的でありながらも統率的な活動とすることを目的としているが, 実際, 特に安全面を考慮する上で, 点呼, 連絡などの際に極めて効果的であった。

### ④ 学部長面談会

集合時間の厳守, マナー遵守など, 安全な研修実施のために, 数名の学生での学部長面談会を実施した。これは, 種々の連絡集会に不参加あるいは遅刻の学生が見られ, 自己管理能力を高める目的で5月に実施した。

## 4. 実 施

実施状況について特に昨年度までと大きく異なっている点について詳細を報告したい。なお, 研修日程は, 参考資料2を参照されたい。また実施状況の写真を巻末に掲載している。

### (1) Wesley 大学での研修

#### ① Student Leaders: Wesley 大学では, 今

年度より在学中のアメリカ人学生を本学のプログラムに常駐させることとした。Student Leaders と称するこれら学生は, 学生寮で生活を共にするばかりでなく, 学習面で多様なサポートを行うと同時に, 英語の授業以外のアクティビティを企画・実行し, かつ本学学生たちと Wesley 大学のスタッフとの橋渡し役を兼ねている。Student Leaders の活躍なしには, Wesley 滞在中のプログラムは成功しなかったといっても過言ではない。本学の学生たちにとっても, 英語でのコミュニケーションを十分に試することができる上, また異文化に気軽に接する機会の提供という面でも, おおいに研修に貢献した制度であるといえる。

② ESL クラス: 事前に Wesley 大学から3クラスへのクラス分けをする情報があり, 習熟度別に学生を3クラスに分けたリストを送付した。ところが, 開校式で渡されたリストは, 大きく異なったものであったので, 後にコプラン副学長に問い合わせたところ, 習熟度の資料は, 「一つのクラスに様々な学力の学生を入れ教育する」Wesley 大学の基本方針に必要なだったとのことであった。各クラスには1名の Student Leader が配属され, 教員の指導のサポートを行っている。クラスの運営は熟練した ESL の講師が中心であったが, ここでも Student Leaders の存在は大きかったといえるだろう。なお, 午後の学習プログラムは, ESL の担当教員も参加し, これらの立案・指導は教員と Student Leaders が協力して行っていた。この ESL についての本学学生の反応は, 極めて良好であり, すでにホームページにその詳細(および研修中の活動状況)について一部の学生のレポートを掲載しているので, [http://www.hitech.ac.jp/campus/language\\_study/index.html](http://www.hitech.ac.jp/campus/language_study/index.html) にて参照されたい。

## (2) Wesley 大学以外での見学

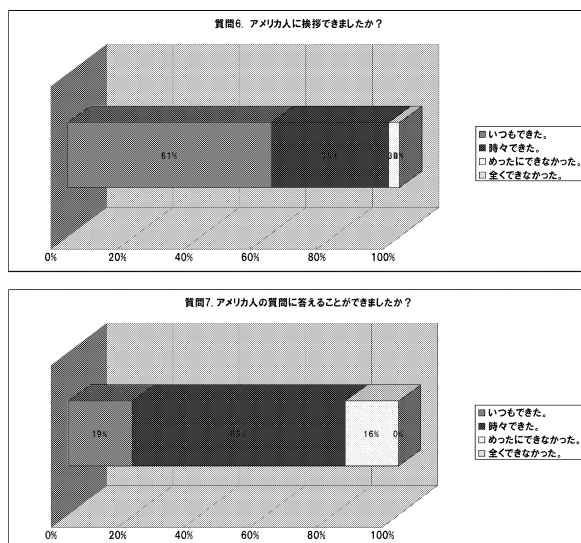
- ① ニューヨーク市：グラウンドゼロや国連本部などの社会的な意義の深い市内各所と合わせて、本研修の主目的地として、ニューヨーク近代美術館（MoMA）とメトロポリタン美術館にて見学を実施した。当初、2つの美術館は大規模で複雑な経路になっていることから、見学後の参集が気がかりであったが、実際には、複数学生での見学を指導したことにより、時間厳守がほぼ完璧に果たされるなど、不都合な点は皆無であった。学生からは、学校の教科書に掲載されている作品の「ほんもの」を見ることができたとの感動の声が多く寄せられている。
- ② ワシントン DC：ワシントンのスミソニアン博物館群での自由行動においては、悪天候から一部施設が閉館となっているなど、予定通りの見学ができなかったが、ほぼ1日の自由行動を安全に実施できたことは有意義であった。レポートやプレゼンテーションなどから、世界政治の中心とし

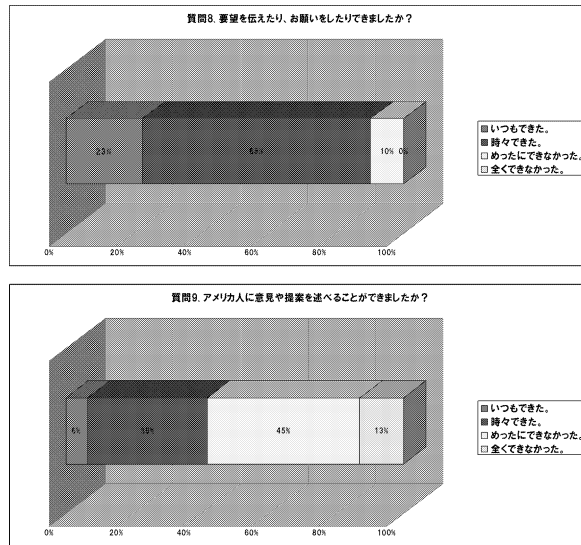
てのワシントンの意義について十分体感できたものと推察している。

## 5. コミュニケーションに関わるアンケート結果

参加学生を対象に、主として英語コミュニケーションについてのアンケートを行っている。詳細は本紀要掲載「感性デザイン学部におけるコミュニケーション能力育成教育に関する研究」（水沼、長谷川、桃井、高橋、川守田）に述べているが、総じて今回の研修での成果を示すものとなっている。なお、質問項目は上記論文に掲載しているが、以下各グラフ上部に併せて記載する。

研修の実施前は、特にコミュニケーションの基礎となる積極性、能動性に不安が感じられたが、アンケート結果から明らかなように、極めて多くの学生が、要望や依頼を含めて英語でのコミュニケーションを実践することができている。意見や提案といった複雑な言語活動も半数に近い学生が実行していることは、ほぼ全員が初めて海外に滞在しているという現実を考慮す





れば、特筆に価する成果であるといえる。

## 6. 参加学生の声

参加学生に感想を書いてもらった。ここでは、代表的な数名の感想の一部を記載する。詳細は、[http://www.hi-tech.ac.jp/campus/language\\_study/index.html](http://www.hi-tech.ac.jp/campus/language_study/index.html)の八戸工業大学感性デザイン学部ホームページに記載している。

(1) 「ESL クラスで学んだこと」ウェスレー大学で私たちが受講した英語の授業は ESL と呼ばれています。“English as a Second Language”ー母語が英語でない人のための授業であり、ウェスレー大学のようにさまざまな国から学生が集まる英語圏の学校には必ず設けられています。私たちの ESL は、研修参加生 40 名が 3 つのクラスに分かれて実施されました。各クラスには、講師の先生が一人、現地の学生サポーターとしてステューデント・リーダーが一人。私はコニー・ストリックランド先生のクラスを受講しました。コニー先生の授業の中心は、アメリカでの生活文化の特色を日本と比較しながら考え、英語で表現するというもの。日常的な食べ物や通貨の違い、感情に関わる表現や特

徴的な慣用句など、実践的で魅力あふれる内容でした。特に強烈な印象が残っているのはサンドイッチ作りです。英語で作り方を説明するだけでなく、実際にサンドイッチを作って食べてみよう、先生が材料を用意してくださいました。皆、興味津々でパンを手にとり、思い思いのサンドイッチを楽しみました。ジャムやピーナツクリーム、マシュマロクリームの濃厚な甘さに、食はその文化の特色を最大に表現するものだとして改めて実感でき、貴重な体験となりました。また、授業は全て英語で行われるので、当初は完璧に聞き取ることができませんでした。しかし、コミュニケーションは言語のみで行われるわけではなく、身ぶりや表情なども大きな役割を果たします。積極的に発言することによって、一日ごとに英語力が向上していくのが自分でもはっきりと分かりました。この ESL で学んだことを今後の英語学習に活かしていきたいと思います。(感性デザイン学部感性デザイン学科 2 学年 大江佳奈子)

(2) 「Keep on working」この言葉は、私がウェスレー大学で受講した ESL クラスの先生が教えてくれた言葉です。ESL は 3 つのグループに分かれ、私はメアリー先生のクラスでした。

最初の授業では、英語を話すということに緊張してしまい、あまり楽しむことができませんでした。むしろ本場の英語にすっかり萎縮してしまい、不安さえ感じていました。その日の午後の予定は、ドーバー市内のバザールでのショッピングでした。寮の前に集まっていたとき、ふとメアリー先生と目が合いました。メアリー先生は笑顔で「こっちにおいで」と手招きをしました。「何を話せばいいのだろう」そう考えながらメアリー先生のところへ行きました。傍に小坂谷先生がいてくださったので、少し通訳してもらいながら英語で話をしました。私は簡単な受け答えしかしていないにも関わらず、メアリー先生は私の英語をほめてくださいました。そのとき私に言ってくださった言葉が“Keep on working”―続けなさい、それが一番身につくから―。私は当初、日本人なのだから英語を話せないのは当たり前だと考えていました。むしろ、間違った英語を話し、それが通じないことを恥ずかしく思い、自分から話そうとしなかったのです。しかし、メアリー先生のその一言を契機に、私はできるだけ英語を話そうと決心しました。バザールへ行く途中もメアリー先生と片言ながらも英語で会話をし、ESL クラスにも積極的に取り組むようになりました。自分から英語を話すようになってからは、ウェスレー大学での生活が楽しく充実したものに大きく変わりました。間違えたり、通じなくて聞き返されたりすることも数多くありましたが、それを恥ずかしいとは思わなくなっていました。間違えることは恥ずかしいことではなく、それよりも恥ずかしいことは自分から話そうと努力しないことだと、メアリー先生が教えてくれたからです。長く正しく話す必要はない。短くても伝えたいことを、それがたとえ単語ひとつであっても、ジェスチャーを交えつつでも、一生懸命伝えれば、相手は大体理解してくれる。大切なのは話してみること。そして相手とコミュニケーションをとろうとする気持ちなのです。「小さなことでも続けていけば必ず身になる。そ

してそれがいろいろなことに繋がっていく」私は今回の体験を通して、これからも英語を勉強し続けていきたいと強く決意しました。(感性デザイン学部感性デザイン学科2学年 小野綾子)

(3) 「We miss you! ～初めての友達～」今回のウェスレー大学での研修プログラムを支えてくれたのは現地のリーダー学生たちです。授業でも大学寮でもいつも笑顔で私達をサポートしてくれました。毎日、英語の授業が終わった後には、リーダー学生が企画したさまざまなアクティビティ、バザールでのショッピングやキックベースなどのスポーツを楽しみました。なかでもリーダー学生が考えてくれたゲームが印象に残っています。それは、指示された10項目のポイント全てをキャンパス内から見つけ、最初に写真に収めてきた班が勝ちというもの。指示はすべて英文で書かれているため読解に苦労しましたが、思いがけない発見がありました。私達の班は見事一番乗りし、マウスパッドやメモ帳、ホイッスルなどの賞品を頂きました。また、寮では、リーダー学生たちと会話が夜中まで尽きることがありませんでした。言いたいことがうまく伝わらずもどかしい思いもしましたが、知っている単語を並べ、身ぶり手ぶりで必死に伝えると、リーダー学生がそれになんとか答えようとしてくれました。アメリカで一緒に笑い会える友達ができるとは思いませんでした。この出会いをいつまでも大事にしたいと思います。修了式では、リーダー学生一人ひとりに、一週間の思いを英語で寄せ書きをしたTシャツをプレゼントしました。リーダー学生たちによるパーティー会場には、正面に大きなメッセージが掲げられていました。「あなたとの別れをさびしく思います」リーダー学生が日本語で書いてくれたものです。思わず私達全員から驚きの声が上がりました。と同時にウェスレー大学を去る時がきたのだという実感がわき、心から寂しく感じました。

研修当初、アメリカで生活することに不安を

感じていた私達に、英語で気持ちを伝えることの楽しさや、伝わったときの感動を与えてくれたリーダー学生に本当に感謝しています。(感性デザイン学部感性デザイン学科2学年 上平結貴)

(4) 「ウェスレー最終章」修了式は、私たちがウェスレー大学に滞在中、毎日通った学食のホールで催された。まず、学生一人ひとりの名前が呼ばれて、コプラン副学長先生から修了証書を受け取り、お世話になった先生方と握手をかわした。次に、こちら側のサプライズ企画として、ウェスレー大学の先生方やステューデント・リーダーたちに、感謝の気持ちを込めたプレゼントを渡した。プレゼントは、前日に皆で集まってメッセージを寄せ書きしたTシャツと花束、日本から用意した風呂敷。プレゼンターが先生やリーダー学生たちに贈呈し、熱いハグを交わした。先生方やリーダーたちは早速包みを開き、Tシャツをその場で着てくれたり、日本の伝統柄の風呂敷をスカーフのように首に巻いてくれたり、大変喜んでくれた。私たちも嬉しかった。その後、ステューデント・リーダーたちがお別れパーティーを私たちのために開いてくれた。ダンスをしたり、ケーキを食べたり、向こうの人たちと楽しい会話をかわし、別れを惜しんだ。ウェスレーでの最後の日は、生涯忘れられないだろう。(感性デザイン学部感性デザイン学科2学年 米田佳介)

(5) 「ニューヨークのひと夏の思い出」今回のアメリカ研修で一番思い出深いのは、ニューヨークです。私たちはウェスレー大学での研修を終えた後、バスで3時間のニューヨーク見学に向かいました。まず圧倒されたのは、ニューヨークの街並みです。エンパイアステートビルやロックフェラーセンター、タイムズスクエア…テレビや写真で見た風景が、目の前に広がっているのです。見学日はあいにくの雨でしたが、それを忘れさせるくらいの興奮を与えてくれました。そして、最も強い印象を残したのが、グラウンドゼロ、同時多発テロにより崩壊した世

界貿易センタービルの跡地を訪問したことです。理不尽なテロによって、多くの罪のない一般の人たちが亡くなった、その場所に自分が立っていると実感した時、体が震えて身動きがとれませんでした。世界平和の実現を私たちに訴えているあの景色は、今でも脳裏にくっきりと残っています。今回の研修では、日本で味わうことのできない貴重な体験をすることができ、英語やアメリカ文化への興味を深めることができました。このような機会を与えてくれた八戸工業大学と諸先生方、また快く送り出してくれた両親に改めて感謝したいと思います。(感性デザイン学部感性デザイン学科2学年 松本寿夫)

## 7. 成果と課題

本研修の成果と課題について述べる。

(1) 当初の目的である「異文化理解能力」、「コミュニケーション能力育成」、「芸術などの鑑賞による感性の育成」のそれぞれについて、大きな成果を上げた。

(2) 姉妹校である Wesley 大学との手作り教育は、5年間の交流の中で、互いの理解が深まり、Student Leaders が生まれるなど改善されてきている。

(3) Student Leaders の存在に加えて、Wesley 大学の所在するドーバー市はデラウェア州の州都であり、アメリカ建国の歴史的都市でもあることから、異文化理解については効果的な教育が実施できた。

(4) 「ほんもの」と触れる体験は、学生たちに大きな感動を与えることができた。

(5) 安全な実施までの指導は、担当者にとって大きな負担であったが得られた成果は大きい。

(6) 不安定な生活リズム、遅刻・欠席、集中力低下など普段の授業で課題となっていることに対し、一時的かもしれないが改善できたことは、いずれ学生の力となると考えている。



学生全員参加型海外研修の取り組み，成果および課題（長谷川・小坂谷・高橋・川守田）

（7）計画を早期に決定することは，成果を高めるために，安全に実施するために重要である。

## 謝 辞

本研修実施に当たり，ご指導，ご協力いただいた学内外のみなさんに感謝申し上げます。

参考資料1：作業スケジュールと作業内容

時期	内容	項目
1月末	第1回事前説明会・参加アンケート【学生】	① 概要説明 ② 参加の意思アンケート
2006/3/31	海外研修案内保護者文書送付	① 目的, 引率担当者 ② 研修日程 ③ 研修費用 ④ 準備スケジュール ⑤ 研修事前アンケート
2006/4/5	引率教員行程協議	3月シミュレーション行程の説明
2006/4/17	第2回事前説明会【学生】	① 目的, 引率担当者 ② 研修日程 ③ 研修費用(パスポート申請, 国内移動, 旅行保険) ④ 準備スケジュール ⑤ 諸注意
2006/4/19	旅行業者打合せ	① 見積もり ② 諸手続き ③ 前泊ホテル・国内移動 ④ スーツケース宅配 ⑤ 説明会日程
2006/4/24	会計課打合せ	① 納入経費 ② 今後の日程
2006/4/24	日程連絡集会【学生】	GW 前後の集会日程連絡
2006/4/27	GW 直前連絡集会【学生】	① 旅行申込用紙配布 ② パスポートコピー, 旅行申込用紙の提出準備 ③ JR 利用者の最終確認 ④ 経費納入連絡 ⑤ 前泊ホテルの部屋割 ⑥ GW 明けの日程
2006/5/8	GW 明け連絡集会【学生】	① パスポートコピー, 旅行申込用紙の回収 ② 研修班編成, ESL クラス分け
2006/5/10	経費納入文書送付	① 納入経費 ② 振込先
2006/5/18	第3回事前説明会【学生】	① 旅行申込書の内容確認 ② 海外旅行保険申込書・出入国カードの記入 ③ 旅行グッズ, パンプ等案内, 諸注意, 質疑応答 ④ 経費の納入状況確認
2006/5/25	ウェスレー大へ名簿送付	
2006/6/1	第4回事前説明会【学生】	① 航空会社 OB 講師による直前指導(出入国手続きについての諸注意) ② 今後の日程
2006/6/7	事前指導 ①【学生】	① しおり配布, 説明 ② 旅行準備確認 ③ ウェスレー大学諸注意 ④ 英語表現
2006/6/8	事前指導 ②【学生】	① しおり説明 ② 安全指導 ③ 諸注意
2006/6/14	スーツケース宅配【学生】	往路は各自で前泊ホテルにスーツケース宅配の手配をする
2006/6/15	壮行会【学生】	① 団長挨拶・概要説明 ② 研修生代表挨拶 (K 科・工各1人) ③ 激励のことば (K 科1年) ④ 学長激励のことば
2006/6/15	出発前最終集会【学生】	最終確認
2006/7/6	報告会【学生】	① 団長挨拶・研修報告 ② 研修生代表挨拶 (K 科・工各1人)
2006/7/6	事後指導【学生】	グループごとの課題・作業, その他の業務連絡
2006/7/21	研修課題発表会【学生】	課題のプレゼンテーション
2006/8/8	大学 HP 等への研修報告掲載	学生原稿と画像 (HP・蒼穹・会報)

学生全員参加型海外研修の取り組み、成果および課題（長谷川・小坂谷・高橋・川守田）

参考資料 2：研修日程

日付	都 市	行 程 等		
6/18 (日)	八戸→成田	八戸出発（新幹線，成田エクスプレスで成田空港へ），成田宿泊		
6/19 (月)	成 田 → D C → Wesley College	8:40 ホテル出発 11:10 成田発（全日空 NH-002） 10:40 ワシントン着，12:00 パスにて空港発 14:00 アナポリス着，昼食休憩 15:00 ドーバー到着前にウォルマート立寄，必要物品購入 17:00 Wesley College 到着，入寮，Campus Tour		
6/20 (火)	Wesley College	語学研修（午前）	語学研修（午後）	市内のマーケット
6/21 (水)	Wesley College	語学研修（午前）	語学研修（午後）	農業博物館，水泳，球技
6/22 (木)	Wesley College	語学研修（午前）	語学研修（午後）	ドーバー市内 徒歩 ツアー（米国建国の歴史）
6/23 (金)	Wesley College	語学研修（午前）	語学研修（午後）	学内ホール修了式，送別会
6/24 (土)	Wesley College → NYC	8:00 Wesley College 出発：自由の女神桟橋へ サウス・ストリート・シーポート Pier17 着，昼食 グラウンドゼロ，ソーホー，エンパイアステートビル，ロックフェラーセンター，国連本部，5 番街ほか 19:30 ホテル着（Double Tree Hotel）		
6/25 (日)	New York City	9:00 ホテル出発 午前 ニューヨーク近代美術館（MoMA） 午後 メトロポリタン美術館 19:30 ホテル着（Double Tree Hotel）		
6/26 (月)	NYC → DC	9:00 ホテル出発 ボルティモア・インナーハーバーにて昼食 15:00 ワシントン着：アーリントン国立墓地，ペンタゴン，リンカーン記念堂 ワシントン記念塔，ホワイトハウス，国会議事堂など外観 19:00 ホテル着（Wingate Inn）		
6/27 (火)	Washington DC	9:00 ホテル出発 国会議事堂，スミソニアン博物館，美術館群～自由行動～ 国立美術館・航空宇宙博物館・自然史博物館など ペンタゴンモールで買物 19:00 ホテル着（Wingate Inn）		
6/28 (水)	DC → 成田	9:00 ホテル出発 12:20 ワシントン発（全日空 NH-001）		
6/29 (木)	成田→八戸	15:20 成田着（成田エクスプレス，新幹線で八戸へ） 21:00 八戸着		

\*一部学生は，成田集合，成田解散



写真説明 左上から、「ウェスレー大学語学研修」,「州議会議事堂を背景に」,「ウェスレー送別会にて」,  
「メトロポリタン美術館」右上から,「料理をしながら語学研修」,「修了式にて,指導の先生たち」,「ワ  
シントンにて」,「写真を撮れる作品例」